

静岡県U12 メキシコ遠征を終えて

- 日時：平成26年7月23日（水）～8月2日（土）
- 遠征場所：メキシコシティー
- 参加者数：選手18名 スタッフ20名
- 対戦相手：クルスアズール・トルーカ・プーマス・パチューカ
- 試合形式：11人制（フルピッチ）9人制（ハーフコート）25分～30分×3本
- 対象者：静岡県4種年代を中心とした育成年代指導者
- 報告者：ユースダイレクター 石井知幸

□「静岡選手のテクニック」

メキシコトップリーグのクラブの下部チームと4試合を行ったが、どのチームと比べても、ボールを扱う技術（コントロール・パス）については、優れていた。選手一人ひとりのテクニックもそうだが、味方を良いタイミングで使うことや、狭いエリア（DFとDFの間）にスペースを見つけボールを受けてターンする技術は、メキシコの選手より優れていたと感じた。また、攻撃では選手同士の関わりが良く1タッチを入れたコンビネーションプレーで相手の背後を狙うプレーも見られた。

静岡の選手たちは、「観る」ことがしっかりと習慣化されて、その中で正しい判断をすることが多くできていた。

□「メキシコ選手のボールへの執着心」

メキシコの選手は、「ボールに対する執着心」があった。点差が離れてゲームが決まってしまうと、集中力を欠くプレーも観られたが、4試合を通してボールに対する執着心が強く、ボールを奪いたいという気持ちが強く伝わってきた。その守備には、細かい動きの約束事はないように映ったが、サッカーの本質はしっかりと根付いていると感じさせるプレーが多かった。レベルは違うがブラジルワールドカップでは、守備に対しての「強度」が世界との差の一つとも言われたが、この年代からボールを奪う気持ちを全面にだしてプレーし継続していくことを思うと、静岡の選手と大きな差になると危機感を覚えた。

□「最終ラインの選手間の距離・ポジショニング」

4バックですべての試合を行ったが、フルピッチでの試合では、最終ライン4人の選手間の距離に課題が出た。基本的には守備時にボールがサイドに運ばれることで、DFラインの4人はスライドを行い、ボール中心（ボール状況）の守備を心掛け4人のバランスを考慮しながらポジションをとるが、選手のなかには、相手選手へのマークの意識が過剰になり相手選手とCloseになりすぎて、味方同士のバランスが崩れてしまい（SBとCB CB同士の距離）最終ラインにスペースをつくってしまっていた。味方とのポジションバランスやマークする相手のポジションを常に意識して、ボール状況が変わるごとに正しいポジションが取れるように経験を積んで行って欲しい。